

2008.02.18

教育再生会議の報告について

宮坂広作

1. 教育理念について

再生会議は、「我が国の教育の在り方を根本から見直す」というので、こんにちの国際情勢や国内状況をふまえて、21世紀の日本を担う国民像についての卓見を期待できると思ったのだが、残念ながらそれはない。「生活者重視」というけれども、格差社会を是正し、国民すべての福祉を実現するような、自立と連帯の市民、困難な状況を克服できる意思と能力をもった生活主体が教育の目標になっている訳ではない。子どもや若者は生活と学習の主体ではなく、教育の「受益者」という容体的・受動的存在にされている。「教育は国家百年の大計」など定義されていない。

2. 知・徳・体のバランスのとれた教育環境

知・徳・体の三育は、平面上に区分された三分野と考えるべきではないだろう。健やかな身体というのは、子どもという人間存在の基底というか、根本的条件である。単に体育だけでなく、給食やアスベスト、校舎の耐震性や通学路の安全性など多くの面で子どもの健康の増進と安全性の確保が目指されなければならない。

徳性を養うのは、知育・体育を通じておこなわれるべきである。知性を欠いた徳性、行動を伴わない徳性では仕方がないからである。修身教科による徳目の教授が形式的でタテマエに終わったことへの反省から、戦後の教育では、ホームルーム、クラブ、生徒会などの生活指導を重視してきたのである。規範を固定的・先験的なものとするのではなく、具体的にいきいきした人間関係の価値として創造すべきである。

3. いじめや暴力の問題は、学級や部活動における現実の人間関係について、生徒がお互いに信頼しあい、協力しあえるような共同体を作り出す取り組みによって解決すべきである。競争的・対立的な人間関係の中で、差別されたり疎外されたりする生徒が出ないようにすること、協力と連帯を大切にし、人権を重んじる集団を形成することが問題を解決する。

4. 規律の問題

この報告書では、「反社会的行動を繰り返す子供への毅然とした指導」と、問題行動に対してきびしく取り締まることを強調している。問題行動には、その原因・背景があること、こころを病んでいる子どもに懲罰を加えても問題が解決しないことはわかっているはずである。カウンセラーなど専門家による指導やボランティアの援助などが有効であろう。

5. 学力の問題

学力や「知」についての省察なしに、学力向上の施策は見出しえない。基礎学力の向上とは、知識を詰め込むことではない。教育内容や授業時間の増加はあまり意味がなく、生徒の内発的な知的関心、学習意欲を育てることが大切である。ゆとり教育の本旨もそこにあったはずであり、提示されている「朝の読書活動」などのほかに、教師たちの工夫によって生み出された多様な方法がある。そうした成果を学ぶこと、教師の研究・研修を支援することが必要である。いま必要なことは、校長の権限強化などではなく、教員の意欲・自主性・努力を尊重し、教員相互の協力を助長して、信頼と希望にあふれた学園を創造することである。